

平成 30 年度

研究開発実施報告書

予測できない未来に対応して生き抜く能力を育てるため、生徒自らが主体的に課題を設定し、自らの力で解決し、自己の成長や可能性を実感していく異学年合同の「共創型探究学習（C A N）」を創設した場合の教育課程や系統的な支援の研究開発

(第 1 年次)

平成 31 年 3 月

香川大学教育学部附属坂出中学校

本報告書に記載されている内容は、学校教育法施行規則第79条において準用する第55条の規定に基づき、教育課程の改善のために文部科学大臣の指定を受けて実施した実証的研究です。

したがって、この研究内容のすべてが直ちに一般の学校における教育課程の編成・実施に適用できる性格のものでないことに留意してお読みください。

平成 30 年度

研究開発実施報告書（要約）

予測できない未来に対応して生き抜く能力を育てるため、生徒自らが主体的に課題を設定し、自らの力で解決し、自己の成長や可能性を実感していく異学年合同の「共創型探究学習（CAN）」を創設した場合の教育課程や系統的な支援の研究開発

（第 1 年次）

平成 31 年 3 月

香川大学教育学部附属坂出中学校

平成30年度研究開発実施報告書（要約）

1 研究開発課題

予測できない未来に対応して生き抜く能力を育てるため、生徒自らが主体的に課題を設定し、自らの力で解決し、自己の成長や可能性を実感していく異学年合同の「共創型探究学習（CAN）」を創設した場合の教育課程や系統的な支援の研究開発

2 研究開発の概要

「Society5.0」とされるこれからの中社会においても、柔軟に対応し能動的に学び続ける生徒を育成するため、新領域「共創型探究学習（CAN）」を創設する。そして、各学年の生徒1名ずつの小集団を編成し、自ら設定した課題の解決に向けて探究活動を進めていく。

1年生は見習いとして集団に参加し、経験を積みながら2年生（弟子）となり力を付けていく。そして3年生（師匠）では探究の中心として活動する。つまり、経験が違う異学年集団に属して活動することで、経験豊富な者から様々なことを自ら学び取り、「見習い→弟子→師匠」のように成長していくことをねらう。

ここでは、「主体的に課題を発見する力」「自らの手で課題を解決していく力」「小集団内、及び小集団同士で協力し合うコミュニケーション力」「自己の活動を内省し、未来に活かす力」などの資質・能力を育成する。特に、以下のような新領域特有の資質・能力も育成し、その変容を分析する。

<師匠> 3年生	<ul style="list-style-type: none"> ・責任ある行動をとる力 ・人の力を効果的に引き出す力 ・段取りよく準備する力
<見習い・弟子> 1・2年生	<ul style="list-style-type: none"> ・役割を果たす力 ・自己を分析する力 ・自己形成の先見力
<全体>	<ul style="list-style-type: none"> ・社会の変化に柔軟に対応する力 ・自己をよりよく変革しようとする力 ・新たな価値を見い出す力 ・広い視野を持って物事を分析する力

3 研究開発の経緯

第一年次 (当該年度)	<ul style="list-style-type: none"> ・「共創型探究学習」実施のための、年間計画の作成を行う。どの時期にどのような過程を踏んで行うのかを設計、計画する。 ・スーパーサイエンスハイスクール等への視察を行い、生徒が独自で探究していくための手段や、課題の立て方等を研修する。同時に、生徒が完全に主体的に課題を決めるための素材（探究の種になる題材）をできるだけ集め、蓄積しておく。
----------------	--

	<ul style="list-style-type: none"> ・ 総合学習の時間を使い、時数を減らして短縮型の「共創型探究学習」としてスタートさせる。異学年による小集団（以下「クラスター」と呼ぶことにする）の編成を試験的に行い、異学年での学習がどのように進んでいくのかその経緯を記録する。 ・ 生徒の課題設定のレベルを向上させるため、教師の支援の方法を研究する。どのような情報提供や点検活動が有効かを検証する。
第二年次	<ul style="list-style-type: none"> ・ 年間計画に従い、「共創型探究学習」を実質的にスタートさせる。クラスターの編成の仕方と成果について研究する。前年度の結果を基に、個々の生徒の個性を踏まえた編成を行う。 ・ 生徒の課題設定のレベルを向上させるため、システムの構築や教師の支援方法を研究する。どのような情報提供や点検活動などが有効かを検証する。 ・ 「共創型探究学習」を補完する教師主導の学習「シャトル」が探究課題の解決にどの程度効果があるかを検証する。 ・ 課題追究時の「アクション・ラーニング会議」について、その有効性を検証する。会議中の教師の支援の在り方についても明らかにする。
第三年次	<ul style="list-style-type: none"> ・ 経験の差ができたクラスター活動を通して、各立場（見習い・弟子・師匠）が生み出す意識や能力の高まりを調査するとともに、どのような教師の関わりが有効かを検証する。 ・ 生徒の表出物（探究日記、レポート）等をもとに、振り返る活動が効果的に自己を内省し、次の活動への見通しや活力につながっているかを検証する。 ・ 最終の成果発表会を行い、各クラスターの探究活動の深まりについて評価するとともに、それまでのどの過程が大きく影響しているのかを検証する。
第四年次	<ul style="list-style-type: none"> ・ 課題設定のレベルと、最終的な探究の深まりの関係をもとに、生徒に自由に課題を設定させることの効果について検証する。 ・ 学校外でのフィールドワークを自由に企画させ、それがどの程度探究活動に成果をあげているかを検証する。 ・ これまでの様々な実践データから、生徒の主体性に任せた探究活動を成立させるためのカリキュラムを開発・作成し、その手続きの方法論をまとめる。 ・ 「共創型探究学習」を通して培われる資質・能力について、各学習段階での生徒の具体的な変容から整理してまとめる。

4 研究開発の内容

(1) 教育課程の内容

- 共創型探究学習（CAN）の実施にあたって、次の点を重視して教育課程を編成した。
- ・ 学習する単位を各学年の生徒1名ずつ、合計3名のクラスターとし、「正統的周辺参加論」に基づいて探究活動を進められるようにすること
 - ・ 探究課題の設定、課題の追究を、教師の適切な関わりのもとで、生徒に任せて行わせるために、クラスターが所属する各教室に担当教師を配置すること
 - ・ 探究活動中の課題解決には、「アクション・ラーニング会議」を導入し、「質問」によって自ら解決方法に気づく活動を積み重ねられるようにすること

- ・ 探究の基本的な手順や技能（探究スキル）を身に付け、自分たちの探究学習に活かすことができるよう、探究スキルの習得を目的とした学習「シャトル」の講座を組み込むこと
 - ・ 探究日記（CANLOG）に毎時間の探究の活動内容や考え、記録を残させ、それを節目ごとに振り返らせる時間を設けること

以上の点を重視して計画し、今年度、試験的に実施した共創型探究学習（CAN）の構想が、以下の通りである。

学年	1月・2月・3月・4月・5月		6月	7月・8月・9月	10月・11月
	1人CAN (個人で探 究テーマを 設定)	2人CAN→3人CAN (探究テーマ深化・ク ラスター編成)	3人CAN (探究スキル習得・ 活用)	3人CAN (探究活動・外部発信)	3人CAN→1人CAN (発表・発信・振り返 り)
3年生	マインドマップ・探究の種20で探究テーマを探索	ガイドンス・探究テーマ設定	1年生へのプレゼン準備	「CANの日」 【シャトル】 「探究活動に必要なスキルを習得・活用させ・探究シミュレーションを行つたりして専門家（大学教授や企業等）にアドバイスをもらひにかけて活動する。アドバイスをもらいに行つたり・探究に向けての予備調査を行つたりするため一日かけて活動する。 ☆シャトル特設講座 2時間×2講座選択（全16講座）	「Aし会議」 各クラスターでの探究内容の成果や課題について、質問を中心にして明確にしていく。 【シャトル】 「探究活動に必要なスキルを習得・活用させ・探究シミュレーションを行つたりして専門家（大学教授や企業等）にアドバイスをもらひにかけて活動する。アドバイスをもらいに行つたり・探究に向けての予備調査を行つたりするため一日かけて活動する。アドバイスをもらいに行つたり・探究に向けての予備調査を行つたりするため一日かけて活動する。
	探究テーマの再設定	探究テーマの再設定・探究方法の練り直し	第1次クラスター編成会議（2・3年生がペア）	夏休みの探究活動	探究成果発表会に向けてのプレゼン作成
2年生	ガイドンス・探究テーマ設定	ガイドンス		探究活動	探究の成果を最終論文にまとめ、CANものがたりで振り返りを行う。
1年生					

〈シャトル 一般講座（3講座）〉

分野	講座名	内容
実験	変数の扉	どの講座を選択しても探究のための基礎的な力が身に付くように構想した。そして実際に「課題設定」「課題追究」「表現」「自己評価」の探究シミュレーションを行った。
創造	みんなで匠になろう	
調査	徹底調査！附坂中生の実態とは？	

〈シャトル 特設講座（16講座）〉

習得する探究スキル	講座名
I 課題設定力	①発想法
II 課題追究力	②インタビュー ③取材アンケート ④資料収集A ⑤資料収集B ⑥情報の分析 ⑦データの見方・とらえ方 ⑧情報の読み方
III 表現力	⑨文章表現法 ⑩プレゼン1 ⑪プレゼン2 ⑫視覚化 ⑬グラフの見せ方
IV 自己評価力	⑭リフレクティング
V チームマネジメント力	⑮コミュニケーション ⑯リーダー養成研修講座

これまで本校で実施していた教科横断的な探究スキルを身に付けさせる学習「シャト

ル」の講座を6月に実施し組み込んだ。具体的には、次のような一般講座と特設講座の2種類を設けて実施した。

一般講座は、探究サイクルを通して「実験」「創造」「調査」における基本的な探究スキルを身に付ける場として設定した。特設講座は、16講座開かれ、より具体的な探究スキルが身に付けられる場として設定した。

また、適切な教師の関わりのもとに生徒に任せて探究課題の設定、課題の追究を行わせるため、「課題設定」や「課題追究」の時間を可能な限り確保した。そして、最終的に探究したことを探査して表現させる成果発表会も計画した。

新領域の創設1年目はどの学年の生徒も同時スタートであるため、経験の差がなく本来ねらっている能動的な学び取りと「見習い→弟子→師匠」の成長はあまり期待できないが、年度を重ねることで生まれてくると考え、まずは今回、これらの構想を可能な範囲で試験的に実施していくことにした。

（2）教育課程の内容は適切であったか

① 「正統的周辺参加論」に基づいた探究活動について

- ・ 1年生や2年生が3年生の探究を手伝いながら一緒にになって探究活動を行う中で経験を積み、探究するためのスキルやノウハウを獲得できていた。
- ・ 3年生にとっては、一人で探究していると、研究の視点が偏りがちになる。しかし、自分の探究テーマにそれほど詳しくない他学年の生徒や興味はあるが性別の異なる生徒などと探究小集団を形成することで、多様な視点から探究を見直したり、意見をもらったりすることができていた。
- ・ 3年生は1、2年生をリードする立場として、責任感や計画性、チームマネジメント力などの育成にもつながっている。一方、1、2年生にとっても自分の興味関心を広げ、広い視野で物事を分析したり、自分の得意や不得意など自己を知るきっかけになったりしている。

反面、課題としては以下のことがあげられる。

- ・ 3年生の探究活動に対する意欲や熱意で、小集団全体の探究レベルが大きく左右されること。
- ・ 小集団の編成の過程で、探究の中心となる3年生と1、2年生とで実施したい探究テーマが大きく異なる場合がある。その際、1、2年生が探究に対して意欲を失い、非協力的になったり、3年生が本当にやりたい探究と違う内容になってしまい、意欲が失われたりすることがあった。

② 探究小集団が所属する各教室に担当教師を配置することについて

- ・ 生徒の探究に対して、新たな視点から関わったり、探究が行き詰ったときに適切な助言やアドバイスを行ったりすることができた。
- ・ 教師が具体的な助言を行うことが困難な場合は、外部の専門家とつなぐための窓口となることができた。

反面、課題としては以下のことがあげられる。

- ・ 生徒への関わり方のノウハウが確立されておらず、教師によって関わり方やその度合いに差があったこと。特に、新任教員にとっては、このような活動を行うことに対

し、戸惑いも多かった。

- ・ 教師が生徒に全く関わらないことも問題だが、逆に探究に関わりすぎると、生徒が本当にやりたいことからずれてしまう場合もあった。どの程度、教師が探究に対して指導や助言を行えば良いのかの判断が難しいこと。

③ 「アクション・ラーニング会議」の導入について

教師主導ではなく、生徒同士の関わりの中から解決方法や問題の本質に気づいてもらうというねらいで行った。この会議を実施した多くの生徒から「参考になる意見をもらえた」という好意的な反応が得られた。しかし、いつ、どのタイミングで、何回ぐらいこの会議が必要とされているのかなどが十分に確立できておらず、場当たり的な取組になってしまったことや生徒同士で質問することができず、結局教師が議論を主導している場面も多く見られたことなどが課題としてあげられる。

④ 探究スキルの習得を目的とした学習「シャトル」を組み込むこと

「シャトル」学習によって、実験の組み立て方や調査の方法、データの回数、データ処理の方法などの探究に必要なスキルを身に付けることができ、それを自分の探究に活かせている。しかし、「シャトル」学習で学ぶスキルがすべて探究に必要なものになっているか、講座内容などを再検討していく必要がある。

⑤ 探究日記（CAN LOG）による振り返りについて

実験データや調査記録だけでなく、探究の過程で自分が感じたことや気づいたことを残すことは、自分の取組をフィードバックし、改善点や次への見通し、新たな疑問などを生み出すだけでなく、自分の探究に対して意味付けや価値付けを行うために重要であると考える。実際、1年間の探究を振り返り、今回の探究学習が自分にとってどのような意味があったのか、この学習を通して自分はどう成長できたのかを記述したもののがみられた。しかし、毎時間の振り返りになると、どうしても内容が浅く、今日やったことを記述しただけのものや1文、1～2行で終わってしまっているものも見られる。次への探究の見通しをもたせるためにも、毎時間の振り返りをさらに充実させていくことが求められる。

（3）指導方法等について

共創型探究学習（CAN）の指導にあたっては、探究課題の設定、課題の追究を、教師の適切な関わりのもとで、生徒に任せて行わせることを重視した。具体的な教師の指導方法としては、以下のように行った。

（事例1）課題「アレルギーの子でも食べられる香川県産の野菜を使ったヘルシーなクッキーを作ろう！」

クラスターが編成され、はじめての顔合わせの場面で。3人全員が「食品」に関する課題を探究したいという思いは共通していたが、「ヘルシーなお菓子」の探究をしたいと考えている生徒、また、「人々が楽しめる食品」に興味をもつ生徒というように、なかなか課題が設定できなかった。そこで、それぞれの興味や願いを踏まえた上で、「すべての人が楽しめるってどういうことだろう？」と問い合わせかけた。すると、一人の生徒から、「そういえば、アレルギーを持っている友達は、いつもみんなと違うものを食べていって、『みんなと同じものが食べたい』ってよく言っていたな。」と今までの経験を振り返る言葉が出てきた。そこから、アレルギーに関する情報を収集し、「みんな」が、「楽しく」かつ「ヘルシーに」食べられるお菓子の探究が始まった。

共創型探究学習（CAN）の指導にあたっては、生徒主体で探究させていくため、教師の指導のあり方として「教える」よりも、問い合わせたり助言したりといった「ともに考える」姿勢を重視して関わった。その結果、生徒の中には、自ら設定したテーマやその追究方法についての新たな視点を自らの力で見い出していく姿も見られた。一方で、教師が生徒と「ともに考える」姿勢は共通しているものの、それだけでは探究の質が高まらないクラスターも見られた。生徒主体で探究させていくとともに、その質を高めていくために、どのような問い合わせや助言を行えばよいか、といった具体的な視点が今後の課題として残った。

5 研究開発の結果及びその分析

（1）実施による生徒への効果

実施による生徒への効果を、生徒アンケート、CAN物語の記述から分析し、報告する。

① 生徒アンケートからの分析

ア 探究テーマの設定に関して

学年に関わらず、約9割の生徒が自分たちの探究テーマに満足していた。しかし、どの学年にも探究テーマに満足できていない生徒が1割程度いる。探究テーマが上手く設定できていない生徒やクラスターは、その後の探究活動も満足いくものにできないことが予想される。このことから、生徒が本当に探究したいテーマをいかに設定させるか、そのための教師の関わりや手立てがさらに必要である。

イ 探究活動に関して

どの学年も約8割の生徒が自分の探究に達成感を感じることができていた。しかし、先ほどの探究テーマの結果と比較すると、満足度が高い生徒の割合が低くなっている。このことから、探究テーマは満足いくものが設定できたが、探究活動につまずきを感じている生徒がいることがわかる。次年度以降、このような生徒に対して探究活動を深めるための教師の関わりや手立てがさらに必要である。

ウ 異学年でのクラスター活動に関して

今年のやり方のようにテーマを中心として編成した異学年クラスターについては肯定的なとらえ方をしている割合多く、次年度も継続していきたいと考えている。

また、クラスター内での話し合いについては、おおむねどのクラスターでも活発な話し合いが行われていた。しかし、今年度の活動の様子を見ていると、対話や活動が停滞している場面やクラスターも見られた。そのようなクラスターに対して、適切に教師が関わることが今後も必要である。

エ シャトル特設講座に関して

シャトルの講座で学んだ探究スキルが、自分の探究に役立ったと感じている生徒が、どの学年においても8割を超えていた。今後は、シャトルで学ぶ探究スキルの内容をさらに生徒の探究に近づけるように改善するとともに、教科の学習とシャトルのつながりを生徒はどうに感じているのかについても調べていきたい。

オ 自分自身に関して

生徒アンケートの結果から、異学年のクラスターで探究する中で、1年生や2年生の中に、探究したいことが芽生え、探究活動に対して意欲が高まっている様子がわかった。

また、自分自身をよりよく知ることができたという生徒の割合は、中心となった3年生だけでなく、1、2年生も高い傾向であった。

② CAN物語の記述からの分析

生徒のCAN物語の記述から、生徒はCANの学びを自分なりの経験や価値観と結びつけながら振り返ることで、CANでの学びを自分なりに意味づけたり、価値づけたりできていた。また、CANの活動や振り返る行為が自分の学ぶ意欲を高め、自分自身について知ったり、自分の将来について考えたりすることにつながっていることがわかった。

(2) 実施による教員への効果

実施による教員への効果を教員対象に行ったアンケートから分析し、報告する。

① 教員対象のアンケートから

ア 生徒の理解への深まりについて

教員アンケートの記述内容を大きく分類すると、次の3つの意見に集約できた。

- 異学年の関わりや、リーダーとして動く姿など、授業では見られない生徒的一面を見ることができる。
- その生徒がどんなことに興味・関心をもっているかがわかる。
- 生徒と一緒にになって探究したり、考えたりすることで生徒への理解が深まる。

これらの意見は、CANが「異学年のクラスターで活動していること」、「教師が課題を設定するのではなく、生徒自らが課題を設定し探究させていること」、「安易に答えのない課題に挑戦させていること」など、CANの特徴的な取り組みによって生まれたものである。それらが、生徒だけでなく教師の生徒理解を深めることにも有効であることがわかる。

イ 教科等の指導方法の改善について

教員アンケートの記述内容から、教師自身が、どのような視点で自分の教科に生かせるかを考える視点がもっているかが重要だということがわかった。生徒が探究的に学ぶための教師の支援や関わりを行うための指導力を養う場として、このような活動での関わりは有効である。

ウ 教員間での連携について

教員アンケートの記述内容から、シャトルやCANのような教科の枠を超えた学習を行うことで、教師間の連携の必要性が生まれることがわかった。しかし、教師自身も連携の重要さを理解しているが、目の前の生徒の対応に追われてしまい、教師間での打ち合わせや連携が十分にとれていない場合があることもわかった。

エ 生徒の探究を深める関わりについて

教員アンケートの記述内容から、探究を深める関わりについて多くの教師が悩んでいることがわかる。イとも関連して、どのように関わることが生徒の探究的な学びを深めるのかを教師が考えていくことで、教科指導にも生きてくると考える。専門外で自分には関わらないと思うのではなく、探究を深めることができる具体的な手立てを提案し、教師に示していくことで、教師の自信を深め、教科の指導にも生きてくると考える。

オ 外部機関（大学や企業など）とのつながりについて

教員アンケートの記述内容を大きく分類すると、次の3つの意見に集約できた。

- CANの探究が専門的になるほど、教科の枠を超えた総合的なものになり、専門

家や外部機関と連携する必然性が生まれる。

- 教師が、外部機関と関わるなかで、どの教師が担当しても生徒は数年間にわたって継続して探究を進めることができる。
- 外部機関とつながることで、生徒は大きく刺激を受けている。

反面、課題として出ているのが、次の2点である。

- 外部との連携があるかないかだけでなく、生徒にとって本当に有効に働いているのかを常に把握しておくこと。
- 継続的に外部と連携していくために、生徒個人任せにしないこと。

③ 成果と課題

CANでの取り組みが、生徒の理解を深め、指導法の改善や教師間や外部機関との連携を促すことに一定の効果があることがわかった。しかし、教科の指導とどうつながるのかわからなかつたり、生徒の探究を深めるためにどう関わればよいかわからなかつたりする教員の実態も見えてきた。総合的な学習における指導力の向上は、各教員の教科指導にも反映されるものだと考えている。しかし、それを教師個人に任せるのではなく、具体的な手立てを提案したり、教師間で成果を共有したりするなどの取り組みが今後さらに必要であることがわかった。

6 今後の研究開発の方向

- ・ 【クラスターの編成】同じ課題追究を行うクラスターを作らなければならない。どのように1人→2人→3人へと編成していくのか。興味・関心が生徒個々で違う中、どう結びつけていくのか。そして、最も重要なのは「見習い→弟子→師匠」への成長をどう効果的に引き出していくのか。
- ・ 【課題設定】自由に探究テーマを設定できる反面、生徒の生活経験の範囲にテーマの幅がとどまる傾向が見られた。また、生徒の中には長い時間をかけて探究活動を行う価値のあるテーマを設定できないクラスターもいくつか見られた。各クラスターが幅広い分野から具体性のある探究テーマを設定するために、どのようなシステム構築や支援を行えばよいのか。
- ・ 【課題追究】探究方法の客観性が薄かつたり、調査や実験結果のデータ量が少なかつたりするクラスターも見られた。また、探究テーマが幅広いため、本校教員だけでは対応できないテーマも多い。大学教授や専門家とどうつないで効果的に支援を行っていくのか。
- ・ 【自己の内省化】CAN LOGを、より当事者性のあるものとし、自己の成長や可能性を実感させ、新たな価値をさらに見い出そうとする態度につなげるには、どのような教師の関わりが必要か。
- ・ 【表現・発表】探究の過程や結果、結論などを発表用ボードやプレゼンを作成して発表させた。立派な発表ができるクラスターもいるが、その場の思いつきで発表しているクラスターも見られ、課題が残る。
- ・ 【資質・能力の分析】今回は試験的な実施のため、どのような資質・能力がどの程度高められているかを十分に分析できていない。

香川大学教育学部附属坂出中学校 教育課程表（平成30年度）

	各教科の授業時数										道徳	総学習的な時間	特別活動	共創型探究学習	総授業時数
	国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保健体育	技術・家庭	外国語						
第1学年	138 (-2)	103 (-2)	138 (-2)	103 (-2)	45	45	103 (-2)	68 (-2)	138 (-2)	35	0 (-50)	35	64 (+64)	1015 (0)	
第2学年	138 (-2)	103 (-2)	103 (-2)	138 (-2)	35	35	103 (-2)	68 (-2)	138 (-2)	35	20 (-50)	35	64 (+64)	1015 (0)	
第3学年	105	140	140	140	35	35	105	35	140	35	20 (-50)	35	50 (+50)	1015 (0)	
計	381 (-4)	346 (-4)	381 (-4)	381 (-4)	115	115	311 (-4)	171 (-4)	416 (-4)	105	40 (-150)	105	178 (+178)	3045 (0)	

※授業時数、単位数の増減等については、表中に記号を付けたりゴシック体で示したりするなど、教育課程の基準との対比が明確になるよう記載すること。

学校等の概要

1 学校名、校長名

かがわだいがくきょういくがくぶふぞくさかでちゅうがっこう
香川大学教育学部附属坂出中学校 校長 高木 由美子

2 所在地、電話番号、FAX番号

香川県坂出市青葉町1番7号 電 話 0877-46-2695
FAX 0877-46-4428

3 課程・学科・学年別幼児・児童・生徒数、学級数

第1学年		第2学年		第3学年		計	
生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
105	3	119	3	120	3	344	9

4 教職員数

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭
1	1	1	0	1	15	0	1	0	0
講師	ALT	スクールカウンセラー	事務職員	司書	計				
5	1	1	4	0	31				